



TITLE:

第37回日本泌尿器科学会中部総会 ラウンド・テーブル・ディスカッ ション(1)実験操作による抗癌剤効 果判定

AUTHOR(S):

吉田, 修

CITATION:

吉田, 修. 第37回日本泌尿器科学会中部総会ラウンド・テーブル・ディスカッション(1)実験操作による抗癌剤効果判定. 泌尿器科紀要 1988, 34(11): 1871-1871

ISSUE DATE:

1988-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/119786>

RIGHT:

第37回日本泌尿器科学会中部総会
ラウンド・テーブル・ディスカッション (I)
実験操作による抗癌剤効果判定

京都大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 吉田 修教授)

吉 田 修

ROUND TABLE DISCUSSION (I)
EXPERIMENTAL STUDIES FOR EVALUATION
OF CHEMOTHERAPEUTIC AGENTS

Osamu YOSHIDA

*From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University
(Director: Prof. O. Yoshida)*

INTRODUCTION

Knowledge of drug sensitivity of individual tumors prior to the initiation of the therapy will increase the efficiency of the therapy and save the use of ineffective anti-cancer agents. Those who are engaged in the treatment of cancer must be informed of 1) what sensitivity tests of anti-cancer drugs are available, 2) what theories and principles these tests are based on, and 3) how the results of these tests should be interpreted and clinically applied.

We hope that the records of the round-table discussion compiled in this volume will promote understanding of these points.

(Acta Urol. Jpn. 34: 1871, 1988)

癌の化学療法は無効であれば、結果的には患者に害を与える行為にもなりかねない。抗癌剤は、正常細胞であっても増殖する細胞には作用し、骨髄抑制を始めとするいろいろな副作用を惹起するからである。いっぽう有効な化学療法は、転移を有する症例でも治癒に導くことが可能な場合もある。われわれ泌尿器科医はそれを精巣腫瘍において経験している。

個々の腫瘍における薬剤感受性を治療開始前に知ることができるならば、治療効果を上げることができ、無効な抗癌剤の使用を避けることができる。しかしながら、抗癌剤感受性試験は、細菌にたいする抗生物質の感受性試験のように簡単ではなく、問題点も多々ある。

癌の治療に当たるものは 1) 抗癌剤感受性試験にはどのようなものがあり、 2) それはどのような理論に基づいており、 3) その成績をどのように解釈し臨床的に応用したらよいか、を知っておかねばならない。このラウンド・テーブル・ディスカッションの記録を通じてこれらの点を理解していただければ、目的を達した事になる。

(1988年7月1日受付)